

張り合い

(最近多くなつたな)

博がため息をついた。去年還暦を迎えた母親の失禁がひどくなつて来たのである。それも博が家にいるときに限つて。

二年前に女房と別れた博は母親の信子と二人で暮らしている。四十間近の博に再婚する気持ちは全く無かつた。今更母親を一人にする訳にも行かないし、その上での話しとなると年寄りの面倒を見て貰うための再婚のようで気が退けるのである。

最初の失禁は去年の夏だつた。食事が終わっても椅子から立ち上がらない信子を不審に思った博が母親のスラックスに出来た大きな沁みに気付いた。

「母さん」

信子の目が虚ろだつた。慌てた博が信子を立ち上がらせてスラックスを下ろす。スラックスだけではない。下着もビッシヨリだつた。風呂場から替えの下着とパジャマを持って来た博が信子の下着を下ろした。僅かに少し白いものが混じつた毛もビッシヨリ濡れていた。博が丹念に拭き清め、片足ずつ上げさせて新しい下着とパジャマを履かせた。その間、信子は虚ろな目で宙を見据えていた。

母親のこんな姿を博は見たことが無かつた。昔から厳格だつた母親は決して自分の肌を息子の前では晒さなかつたし、そう言う話題すら顔をしかめて厳しく戒めて来たのである。博が母親の女の部分を見たのは実際問題これが初めてのことだつた。

信子は見えた目が若々しいので外見上は失禁や呆けとは無縁に見える。確かに少し前から髪に白いものが混じり始めていたが、それも今では薄い栗色に染めているので全く目立たない。

むしろ染めることの出来ない下の毛に混じった白髪の方が少しでも母親の歳を感じさせた。それでもお腹から太ももにかけての肌には弛み一つ無く、そこだけ見る限りでは四十でも十分に通用する。胸も服の上から見た限りではそれなりの膨らみを保っていた。そんな母親が呆けてしまったなど、博には到底信じられなかった。

翌朝、信子はいつもの厳格な母親に戻り、てきぱきと家事をこなした。博の弁当を詰め、着替えのワイシャツからネクタイまで用意してきちんと送り出す。昨日のことは全く憶えていないらしい。博もそれには一切触れず家を出た。

それから一週間ほどして再び信子が失禁した。苦笑した博が前と同じように丁寧に面倒を見る。今回はタオルで拭くときに信子が自分から片足を椅子の上にした。母親の大きな髀がパツクリ口を開けた。博が初めて間近に見た母親の生々しい姿だった。濡れた肌をそつとタオルで拭いても信子は何も言わず、息子に全てを任せた。

失禁の回数は日を追う毎に増えて行った。週に一度が二度になり、毎日になるまでにそれ程時間は掛からなかった。最近は何日に何度もと言う状態になっている。

不思議なことに、博が会社に出ている間は全く大丈夫だった。ちゃんとトイレにも行っているようで、会社から戻ったときは何ともない。ようやく博がくつろいだ時をまるで見計らったように信子は失禁した。また、夜、寝ている間も粗相したことはただの一度もない。世話をしてくれる息子がいる時に限っての失禁だった。

(そう言えば……)

始末を終えた博が信子の失禁の様子を思い出した。妻と別れた博はそれ以来女つ気の無い暮らしを続けている。四十になったとは言ってもまだまだ男の機能は健在で、時にはモヤモヤした気分になり、自分で慰めたりもする。

そんな中で見た母親の女の部分は妙に生々しく、ある時、丁寧に拭いた後でそっと指先で触れてしまったことがある。正気の時の母親なら思いもよらないことなのだが、その時の信子は腰を突き出し、自分から脚を開きさえした。考えてみればその頃から急に失禁の回数が増えたような気がする。

三十分位してまた信子のパジャマの前にシミが出来た。回数が増えた分だけ量が減って、ほんの小さなシミだった。博は老人用のおむつや尿取りパッドも試したのだが、正氣に戻った信子にはその理由が分からないらしく、すぐに外してしまった。

博は信子を絨毯の上に寝かせ、赤ん坊のように両足を上げてパジャマのズボンと下着を脱がせた。そのままの格好で脚を開

いている信子をタオルで拭い、改めて母親の女の部分を見下ろした。粘膜に老化は無いのだろうか。その部分は全く年齢を感じさせない。やや分厚い襪に囲まれたピンク色の肌。艶やかに濡れたその肌が何となく物欲しそうに見えた。

博が信子の足元に座ってそっと指先で触れてみた。こうしている間の記憶は殆ど無いらしい。改めて触れた襪の中は思った以上に濡れていた。一渡り探った後、博が指先をそっと送り込んだ。父親は若くしてこの世を去っているので、もう二十年以上ここに踏み込んだ指は無いはずである。

博の予想に反してそこはかなり緩かった。暫くしないときつくなる。もう長年付き合っている女友達は何ヶ月振りかで博に抱かれるといつもそう言う。個人差なのだろうか。

博がもう一本指を入れてみた。途端に信子が腰をくねらせた。緩かった内部が急に狭まり、目で見ても分かるほどに入り口がヒクついた。母親の歳になってもやはり感じるようである。博が母親の生々しい姿に思わず生唾を飲み込んだ。

博はそのまま母親への愛撫を続けた。指を抜き差ししながら、もう一方の手でそっと顔を出した小さな粒を摘む。無表情だった信子が目を固く閉じて眉根に深く皺を寄せた。指先に感じるほど潤いが増し、溢れ出たものが尻を伝って流れ落ちた。

突然、信子がキリキリと博の指を締め付けた。胸が大きく上下して呼吸が荒くなっている。こんな時でも信子の慎み深さが

ブレーキを掛けているのか、あからさまな喘ぎが口から漏れることは無かった。

博がもう一度母親の体を清め、用意してあった下着とパジャマのズボンを履かせた。信子の失禁が非道くなってから下着とパジャマだけはそれぞれ三十枚以上買い揃えてある。母親を抱き起こしソファアに座らせた博が部屋を出た。暫く一人にしてあげると元通りの厳格な母親に戻るのである。

「博、ちよつと聞いてもいいかい」

翌日、会社から戻った博に信子が遠慮がちに聞いた。

「何だい、母さん」

「あの、風呂場にあるパジャマと下着なんだけど、あんなに沢山、お前が買ってくれたのかい」

「えっ、何のこと」

「風呂場に出てるパジャマと下着のことだよ」

「さあ、母さんが自分で買ったんじゃないの」

博は適当にとぼけた。正気の信子と失禁した後の信子は全く別の人格のように感じていたからである。

「そうかねえ。私には全然覚えがないんだけど」

「やだなあ、母さん。まだ呆けるには早いよ」

「やっぱり私を買ったんだね。あんなに沢山」

博は着替えさせた後の汚れた下着とパジャマはすぐに水に浸けておいた。そうすれば正気に戻った信子が自分の失禁に気付

かずに済むと思ったのである。

「ご飯が先。それともお風呂」

「腹減ったから、ご飯にしよう」

その日は珍しく信子が粗相をしなかった。食事が終わり、博が風呂から上がって来ると信子がソファーにだらしなく寝そべっていた。注意して服を見たが漏らしたようなシミは見当たらなかった。

「母さん」

声を掛けたが返事がない。目は開けているのだが焦点が定まっておらず、博の言葉にも全く反応しなかった。

「母さん、大丈夫かどうか、着替えてみようか」

それでも返事がない。博がストラックスのベルトに手を掛けても全然動かなかった。既に正気の信子ではない。そう判断した博が手早くストラックスを脱がせ、セーター、ブラウスと順番に脱がせて行く。最後の下着を下ろしても信子は無反応だった。

博が信子の腹に唇をつけ、そのまま下がって行く。その時になって信子がスツと脚を開いた。博が襞を分け、小さな粒を口に含み、指を二本揃えて中を探り始める。信子が逆エビに腰を突き上げた。奥を探る指の動きが淫らな音を立てている。博が見守る中、信子は三度続けて登り詰めた。

博が信子にパジャマを着せようとしたが、今日の信子はなぜか素直に従わない。手足を突っ張ってどうしても服を着ようと

はしないのである。諦めた博が信子を抱えて寝室まで運んだ。裸のままだが仕方がない。上から毛布を被せ、居間に戻って来た。

息子の前で一人の女と化した信子。無意識で失禁を繰り返したのは博に恥ずかしいところを見られ、触れられる、それを期待してのことではないのか。その証拠に博がはつきりと母親を愛撫するようになってからの信子はただの一度も失禁していないのである。ビールを飲み干した博が電気を消して二階の寝室に上がった。自分の部屋に戻る前に母親の様子を見に行った。ドアを開けてみるとベッドはもぬけの殻だった。

「母さん、どこ」

信子が一階に下りてきた様子はない。二階の納戸を覗き、最後に自分の部屋のドアを開けた。博のベッドの上に信子が大字で寝ていた。

「母さん。心配したよ」

博が近付くと信子が手を差し伸べて自分の方に引き寄せた。大きく開いた腿の付け根に博の顔が行くとそのまま大人しくなる。この歳になって肉の悦びに目覚めたのだろうか。信子が貪欲に息子の唇を求めた。

「母さん、抱いて欲しいの」

口を離れた博が意を決して言った。ここまで来れば残るはそれしかない。信子が目をつぶった。博の脳裏に母親がずっと正

氣だったのではないかと言う確信が芽生えた。

「分かったよ、母さん」

博がパジャマを脱いで裸になった。ゆっくりと母親の上に重なって行くが、博の体は全然反応しなかった。信子の身体に魅力を感じない訳ではない。もし、これが赤の他人だったら勇んで一つになっていたことだろう。しかし、今、自分の胸にしがみついているのは自分の産みの親その人なのである。

博が信子の手を取って自分の方に導いた。もし母親が自分の体を握りしめてくれたら吹っ切れるような気がしたのである。初めて博の体に触れた信子の手が弾かれたように逃げた。博は信子が正気だと確信した。今、自分の胸の中にいるのは、あの慎ましい母親そのものである。

もう一度、博が信子の手を導いた。今度はほんの僅かの間握りしめ、再び慌てたように手を離れた。根気よく博がその動作を繰り返した。その度に信子が手を離すまでの間隔が長くなって行く。七回目によりやく信子が手を離さなくなった。それでも緩く握っただけで動くことは無かった。

時間がゆっくりと過ぎて行く。今日はこのまま寝ようか。博が諦めかけたその時、まるでそれを見透かしたかのように信子の指先がジワツと動いた。博の体がそれに反応して少しだけ首を持ち上げる。それに呼応して信子の指がまた動く。こうなる

と博が臨戦態勢になるまでにそれ程時間は掛からなかった。

改めて博が母親の体を探ると、そこは博の心配をよそに赤々と濡れていた。そつと宛った博の先端を信子が待っていたとでも言うように口を開いて飲み込もうとする。入る瞬間は全く抵抗無く、あつと言う間に博が根元まで飲み込まれてしまった。

博が思わず呻いた。何という動きだろう。それはまるで唇のように博を吸い込み、迎えた内部が嵐のような荒々しきで動き始める。どう形容したらいいのか。それは間違ひなく名器と言つていい。博は自分の母親の意外な一面を知った思いだった。

持続には自信があつた博が呆気なく果てた。母親と交わつていると言う異常な興奮がそうさせたか、それとも今まで出会つたことのない母親の内部に翻弄された結果なのか、博には分からなかった。仕方なく余韻を楽しむことにした博を信子の体が執拗に責め始めた。内部に生じた圧力が津波のように入り口目掛けて押し寄せて来る。幾分固さを失つた博がその力に抗しきれず、吐き出されそうになった。

次の瞬間、博が驚きの声を上げた。まるで寄せる波が返すように、信子の中で別のうねりが生じたのである。今回は入り口から内部に向かう正に引き波だった。固さを取り戻していない博がまるでポンプに吸い込まれるように中に向かつてめり込んで行つた。その吸引力が一瞬のうちに博に新たな硬直をもたらした。

博はさつきから全く動いていない。にも関わらず、博の体が

信子の中で翻弄されている。よく別の生き物と言う表現をするが、信子の体が正しくそれだった。今回は何もしないうちに再び博が登り詰めた。

信子の体が更に強く動き始めた。流石に二度続けて果てた博はなかなか回復する兆しを見せない。それでも柔らかくなった博を信子は半ば吐き出し、寸前のところで信じられない強さで再び内部に向かって引きずり込んで行く。

三十分ほどしてようやく博が回復した。前後の動きは信子の体に任せた博が腰だけを回転し始める。余り元気が無いときによく使う手である。その時なってようやく信子の口から歓喜の声漏れ始めた。

「い、い……」

信子は少し間隔を置いてそう言い続けた。イキそうだ、そう解釈した博が腰の回転を強めた。すると声の間隔が狭まり、やがて長く糸を引くような悲鳴に変わって行った。ラストスパ―トに入った博が自分も思い切り奥目掛けて突き込んだ。

「博ーっ」

信子が一声大きく息子の名を叫んだ。信子が自分の息子と交わっていることをはっきり認めた瞬間だった。

翌日から信子が一切の食べ物、飲み物を口にしなくなった。最初は昨日のショックで食欲が無いのだろうと多寡をくくっていた博もその絶食が二日目に入ると流石に慌て始めた。

恐らく信子は自分が博の足手まといになることを嫌ったのだらう。そして、この世の最後の思い出にと一芝居打ったに違いない。確かにそれはまんまと成功し、博はこの歳になって生涯で最高の交わりを経験した。博は何が何でも信子に水を飲ませ、食事を摂らせる決心をした。

食事はともかく、水っ気を絶やしてはいけない。この歳になれば三日も水分を摂らなければ命取りである。博は近所のスーパーからスポーツドリンクを買い込み、信子の枕元で封を切った。それを一口含むと信子の唇に持って行く。口移しに与えようとした。

最初、信子は歯を食いしばって抵抗した。含んだドリンクが虚しく信子の頬を伝って流れ落ちる。それでも博は諦めない。今度はドリンクを含まずに信子の唇にキスをした。舌の先で唇を分け、食いしばった歯を根気よく愛撫した。とうとう根負けした信子が歯を弛める。その隙に博の舌が信子の口に侵入した。博は唾液の分泌が人一倍激しい。朝、歯磨きをしていてもダラダラ涎がこぼれ落ちて困るくらいである。流石にほっぺたの方からは大した量が出なくなってきたが、舌下腺からは今でも大量の唾液を出すことが出来る。博は根気よく自分の唾液を絞り出しては母親の口に注ぎ込んだ。

「負けたわ」

とうとう信子が博の唇を振り解いて言った。

「素直には逝かせてくれないようだね」

「当たり前だよ。そう簡単に逝かれちゃ困る」

「分かった。分かったから、そのドリンク頂戴」

博が再び口に含んでは信子に口移しで与える。信子は自分から吸い付いてドリンクを美味しそうに飲み込んだ。

「さて、何か作ろうか。腹減ったろう」

信子が恥ずかしそうに頷いた。

「おかゆがいいかな」

「おかゆじゃ物足りないから、何か美味しいおじやでも作っておくれ」

「はいはい。飛び切り美味しいのを作るよ」

博が用意していると信子が降りて来た。

「歩いて大丈夫なの」

「全然。作って貰ってる間に風呂入って来ようか」

「ああ、そうすれば」

「二日入っていないから汚れてるしね」

信子がウインクして出て行った。博はそれが夜の誘いだと分かって苦笑した。

風呂から上がって来た信子は博が用意したおじやを口移しで食べさせてとねだった。最早かつての慎み深い母親の姿はどこにも無かった。

「ねえ、母さん」

「なあに」

「何で俺とって気になったの」

「笑わないでおくれ」

「笑わないよ」

「私がいちゃ博の身動きが取れないだろうって思ってたさ。施設に入ることも考えたけど、結構お金が掛かるんだよね。私の年金くらいじゃ全然足りないし。大昔と違って姥捨てって訳にも行かないしさ。それなら食を断って逝っちゃえばいいって思ったんだよ」

「そりゃあ分かるけど」

博がちよつと考えてから信子に聞いた。

「おしっこ漏らしたの、あれ、わざと」

「うん。そうすりゃ、あんたが面倒見てくれる。嫌でも大事なところ見たり、触ったりしてくれるだろう。あんたに少しでもその気があるなら、何とかしてくれるって思ったんだよ」

「そこが分からないんだよ。あんなに慎み深かった母さんが何でって」

「お前、いつから私が正気だって気が付いてたの」

「最初からおかしいなとは思ってたんだけど、確信したのは始末の後で手で触った後かな。だって、それ以来ピタツと漏らさなくなったじゃない」

「やっぱりね。私もままずいなって思ったんだけど、おしっこ漏

らすのって気持ち悪いのよ。なるべく早くやめたかったんだ」
「そうだと思った。だから正気だなんて勘付いたのさ。それはいいとして、何で俺と、その、しようと思ったの」

「お前、私の体に気が付いているだろう」

「あの、凄い動き」

「うん。私はあれが普通だと思ってたけど、そうじゃないみたいだね」

「普通だなんてとんでもない。何千人、いや何万人に一人かも知れないよ」

「死んだ父さんもそんなこと言ってた。それでさ、実は私、あんたが自分で擦ってるところ見ちゃったんだ。ほら、去年の夏」
「ああ、あの時ね。やっぱり見られてたんだ」

「あんたも不自由してるなって思ったたら、自分の体のこと思いつ出してね。父さんがあんなにいいって言ってたんだから、あんたも少しは悦んでくれるかなって思ってたさ」

「少しどころか、大いに楽しんだよ」

「でもねえ、こんなしわくちやの婆さんで、本当に抱いてくれるかどうか自信なくて、それで時間掛けてここまで来たのよ」
信子がまたおじやをねだった。

「博、ほんとに再婚する気、無いのかい」

「全然」

「まあ、掃除洗濯、食事の世話くらいなら私の足腰が立つ内は

出来るけど、あっちの方が寂しくないかい」

博が何も言わずにニヤニヤと信子を見詰めた。

「えっ、私かい。私や……」

信子が顔を赤くした。

「こんな婆さんでいいの」

「自分じゃそう思つて無いくせに。それに、何万人に一人かも知れないつて言つただらう。使わないで放つておくのは勿体ない」

「そりゃあ、私だつて博に可愛がつて貰えれば生きてる張り合
いがあるつてもんだけどさ」

「それが一番いいんだよ。誰にも迷惑掛からないし、子供が
来る心配もないし。母さんが成仏するまで、せいぜい可愛がつ
てあげるから」

「そんなこと言つていいの。女の平均寿命、幾つだと思つて
るの。八十三か四だよ。まだ二十年以上あるんだよ。その前にあ
んなの方が駄目になつたりして」

「言えてるかも。でも母さんだったら、一度入れてしまえば何
とかなるさ」

「やだよ、この子は。そんな風にあからさまに言われると、顔
が赤くなつちやうじゃないか」

「さて、食べ終わつたらそろそろ上に行こうか」

「何だか恥ずかしいね。あんたとまともにするの、今日が初め

てだから」

「俺もワクワクしてる。今日は早いかも」

「駄目」

信子が真面目な顔で言ったので博が吹き出した。

「大丈夫だって。今日は二度でも三度でも」

「今日は、じゃないよ。今日も、と言っておくれ」

再び信子の股間に顔を埋めた博は、もしかしたら張り合いのある余生を貰ったのは自分の方かも知れないと思った。